

2. 女性性の内的受容

この問題については、やはり昨年度の本紀要に院生の森田美弥子、粟田順子とともに「序報、女子短大生の場合」として報告した。これはまさしく緒についたばかりであって、まだまだ研究方法も主題の方向性も摸索が重ねられなくてはならないが、その後十分な具体的展開はなされてはいない。現在は資料としての女学生の手記が収集されている段階である。

3. 心理学の方法論

これは以前から関心をもっていたテーマであり、講義で「方法としての事例研究」を論じたり、昨年度から梶田正巳先生と「心理学研究法」を担当するようになってからさらに、その問題を深めたものとして自らのうちに定着させねばならないと感じてきたが、昨年の人間性心理学会では「人間理解の方法としての現象学」と題するシンポジウムを企画し、また指定討論者として参加することができて、一步この歩みを前進させることになりえたと感じている。そうはいつても、実はこのシンポジウムの記録をその後、公刊することにしたのであるが、あらためてこれを文章化しようとする、なかなか筆がす

すまないであり、目下はこの問題と格闘中である。

4. 精神衛生

① この文脈では、本学部の附属中・高等学校紀要第30集に「学校精神衛生活動の展開にむけて——ある登校拒否事例との取り組みから——」という小論文を載せた。

② ライフ・サイクルとの関連で精神衛生の問題を論ずること、つまり、正常と異常の弁証法ともいうべき視点からエイジングのプロセス、および日常生活と生の意味を問いかえし、深化させるという作業への方向性については、すでに2年前のこの欄でものべたところであるが、最近、この構想は相当まとまってきている段階にあるといつてよい。

5. その他

毎年前期に「演習・投映法」を担当している時にいつも思うことであるが、前々から懸案になっている教科書「ロールシャッハ法解説——名古屋大学式技法——」改定版の公刊を行う必要がある。いよいよ研究会なども組織し、本腰を入れて積極的に取り組んでいかなければならない時期がきていると感じている。

研究について思うこと

梶 田 正 巳

振り返ってみると、いつの間にか20余年にわたって教育心理学とつきあって、暮らしてきている。その間になした仕事が本当の意味で“教育心理学の研究”という名に価するか否かはさておき、自身の体験を通して、教育心理学の“研究”というものについて、実に考えさせられることが多かった。率直にそういう感じがする訳である。この欄では普通は、過去一年間の研究業績について語るのが習わしになっている。しかし、今回はその習慣を離れて、教育心理学の研究について最近考えることを少し思いつくままに書き表してみたい。

ここ数年来のことであるが、しばしば頭の中に浮かぶ二つの言葉がある。それは、“実学”と“虚学”という言葉である。福沢諭吉の「学問のすすめ」にも強調されているように、実学という概念は確実に存在する。しかし、後者の虚学なる言葉があるかどうかはよく知らない。おそらくないのではないだろう。歴史的にいつても、実学はそれ自体チャンとした意味内容を持っているのである。しかし、筆者は、それはともあれ、現実（リアリティー）と直接の関係を有している学問という意味を実学の

中に込めたいと思う。虚学は、それとは全く対照的である。リアリティーとは何かかわりも有しない研究は、この虚学の中に入るだろう。つまり、学者の頭の中だけの、あるいは机上だけの観念的な学問は、虚学になるように思う。そこでは、学者のサークルの中だけで通用するようなジャーゴンによって通常は研究が語られている。もちろん、そうした研究が意味がないとか、あってはならないとまで極論するつもりはない。

かつて筆者がかかわってきた移行学習というような研究領域は、明らかに後者の虚学に入りそうだ。この領域では、一般はいうまでもなく、それを専門としない心理学者にも理解しがたい複雑な概念が構築されている。そして、こうしたジャーゴンを使わないと研究者同士がコミュニケーションすることもできない。それだけならまだしも、概念で武装された理論や仮説が、理屈が複雑なわりには余りにも当たり前すぎるのである。一般的にいつても、心理学の研究にはこのような特徴がありそうである。ともあれ、確かに概念の構築は研究には必要なのだが、それが研究者の学問的な立場の自己防衛に過ぎないので

あれば非常に問題だと言わねばならないだろう。そうではないと主張するためには、研究が人間智に寄与できるという見通しがないしは確信が与えられねばならないと思う。しかし、移行学習の研究は、この点については確かな見通しを与えていたと言えるだろうか。

その上に、研究は社会的観点からも考えねばならないように思う。この移行学習で多くの学習心理学者を引きつけたのは、ケンドラーだといえるだろう。60年代からおよそ15～20年間、多数の研究者がつぎつぎに移行学習という新しい“波”に乗り、数々の研究を生み出した。いろいろなジャーナルに研究が発表された。学会でも討論がなされた。しかし、80年代も半ばになると、不思議なことに、移行学習は明らかに通り過ぎた過去の“波”になったのである。

それでは、この研究はトータルで見て、心理学の研究の歴史に、さらに言えば人間智に確かな何かを付け加えて、過去の研究となったのだろうか。それとも、学問的に提起された問題が解決されたとか、人間理解に貢献することが明らかになった、というような条件とは全く別の要因によって移行学習の消長は起こったのだろうか。

おそらく、ケンドラーが、この研究に火をつけ、そこに多数の研究者が集まったという心理学史上の事実は残るだろう。また、心理学の多くの概論書に移行学習の研究者として彼の名前は確かにとどまるだろう。心理学のいろいろな著書を参照すると、明らかにこうした状況が読みとれる。しかし、それに続く多数の研究者の営為は、

どうなったのだろうか。手短かに結論を言うようだが、提起された問題が参与した研究者によって解かれ、その結果として人間智を深めていけば火つけ役のケンドラーだけが引用されることはないように思われる。人間智を築いた有効な“成果”の方がはるかに大切なことから。とするなら、素朴な当初の問題提起の研究だけが着目され、精巧なはずの後からの数々の研究が無視されるということはどういうことなのだろうか。

このような学問的状况をみると、移行学習の研究の“波”が静まったのは、研究の成果によって人間智に貢献し、問題解決のめどがついたためではないだろう。それは、研究者集団の中に起った単なる“流行”現象にすぎないのだろうか。こんな疑念が湧いてくるのである。

移行学習は、筆者が身をもって体験した一つの虚学の例に過ぎない。しかし、身の回りを見わたす時、同じような数々の現象が存在するように思われる。それは、主として欧米から新しい研究の“波”としてわれわれの岸边にうち寄せてきている。その研究の波は、何か本当に寄与できるかもしれないという期待を与えそうである。しかし同時に、最近では、それは虚学ではないか？、待てよ！、という内からの言葉が聞こえる。もう一度虚学(?)につき合うほど後が長くはないのではないか。成功するか、失敗するかそれは分からないが、これが“実学”だと思ふ“自分”の“教育心理学の研究”を冒険ではあるが進めてみたい。これが今の偽らざる心境である。